

巻頭言

現代宗教研究所所長 田澤 元 泰

平成二十年六月八日に起きた秋葉原通り魔事件は現代社会が内包する多くの問題点を浮き彫りにさせたような事件だった。まず、秋葉原という場所が象徴的であった。もともと電気街としてかなり専門的な商店が集まっていたが、やがて家電を中心とした大型店舗が軒をならべ、多くの中高年者たちが集まるようになり、さらにパソコン関係の部品や中古などの安売りやアプリケーションソフトの専門店が進出し、パソコンゲームの専門店が並び始めたころから急激に若者の街へと変貌を始めた。現在ではゲームのキャラクターを模写したフィギュアと呼ばれる人形や、メイド喫茶などと従来の電気街とは大きく様相が変わっている。時代の先端が感じられる場所となっている。つぎに、犯行の動機である。警察の説明では「生きがいのなさを感じ、周囲からの孤立感を深めていた時に、そのはげ口だった携帯電話のサイトへの書き込みを無視されたことへの不満が怒りとなって犯行に及んだ。」としている。また、逮捕後容疑者は「生活に疲れた。世の中が嫌になった。人を殺すために秋葉原に来た。誰でもよかった」などと犯行の動機を供述している。さらに、その犯行の凶暴さである。買い物に来ていた多くの若者や、アルバイト中だった大学生らをトラックではねたり、ナイフで刺したりして七人を殺害し、十人に重軽傷を負わせるなどこの事件の異常さが報じられている。犯人が事件を起こした背景には、派遣社員制度などの労働環境にも問題があるのでは

ないかなどの指摘もされた。日頃おとなしく、言われた事を黙々と作業する、どこにでもい
そうな物静かな青年が、ある日突然に凶悪な犯罪を犯す、という事への不安が大きな波紋を
呼んでいる。青少年の心の奥にどのような苦悩が潜んでいるのだろうか、犯罪を起こす前に
防ぐ方法はないのだろうか、宗教では解決できないのだろうか。布教教化を志す者にとって
その課題は重く大きい。一つの事柄を通して、その背景ともなる社会的な成り立ちや、現代
人の抱えている多くの問題点などの情報を集め分析することが問題解決の糸口となる。

コンピュータの世界でよく使われる、アルゴリズムという言葉がある。それは、数学、
コンピュータ処理、言語学などの分野において、問題を解くための効率的手順を定式化し、
それをまとめて表現することを意味する。簡単にいえば、ある問題を解くのにどのように考
え、どのように解決するかを、より確実に伝える方法をまとめる事を指している。特にコン
ピュータではアルゴリズムを指示するための文書をプログラムという。人間より速く大量に
正しい結果を導くことができるのがコンピュータの強みであるが、そのためには正しいアル
ゴリズムに基づくプログラムが必要であり、それによってコンピュータの性能そのものに
まで影響を及ぼす事になる。すなわち、アルゴリズムとはコンピュータが情報を処理する基
盤といえる。当然ながらアルゴリズムは情報処理と結びついていることが多い。数理情報科
学の分野では、世界的な規模で難問を解く、プログラムコンクールが開催され、日本人の若
者も活躍している。そこではこのアルゴリズムに関する考え方やテクニックなどの能力が大
きく求められている。

一般社会に於いて現実には多くの問題は理論として自然な形に表現されている。その解決

とは、これまでにはなかつた新たな仮説が既存の理論で説明できるかどうかを問うことと等しいといえる。そこでは論理による証明が必要となる。なぜなら論理は問題が真か偽かを証明する方法を提供するからである。証明構築過程は明確であり、論理は問題に答える信頼できる方法と見なされているのである。すなわち、ある問題が生じたときに、その問題に関わる情報の収集とその分析により、その問題が新たな解決を必要とするとの判断が出たときには新たな仮説が求められる。そこで作られる新たな仮説は既存の理論で証明されれば解決が可能となり、仮説は新しい理論として存在する事になる。そうしたことの積み重ねが理論の発展であり学問の進化となる。時代から求められ、対応している限りその学問は常に進化を続ける事となる。この進化する学問の世界は、決して問題点を選ばない。つまり固定化した考えから問題点を見いだそうとはしない。単純化するのではなく多様化するのである。

例えば動物行動学で有名な京都大学名誉教授日高敏隆先生の蝶々の研究がある。『チョウはなぜ飛ぶか』で紹介されているアゲハチョウの飛ぶ道の研究は、子供の頃の単純な疑問からはじまって、チョウの生態研究へと展開されてゆく。アゲハチョウには飛ぶ道があつて、気まぐれには飛んでいない事を発見するまでの追求してゆく世界は、読む者を惹きつけて飽きさせない。そこには構築された生物学のうえに、それには捕らわれない自由な研究領域を広げてゆく楽しさがある。しかも、チョウの解剖といった生物学的な世界からではなく、植物や地形的なものから気象的なものなどへと広い学問領域との関連をもたせて、まさに新しい仮説をつくりそれを既存の理論で証明させてあたらしい理論へと発展させている。それは生物学という学問を多様化させて更に進化させているといえる。

教化学も同じ事がいえないだろうか。たしかに教化学は教義のうえで成り立っている。しかし、そこから新しい問題点を見いだして、仮説を導き出し証明して理論を展開させる方法が可能ではないだろうか。新しい仮説の証明は問題の所在が広ければ広いほど、証明すべき既存の学問の範囲も当然広くなる。教化学の発展には、学問的な多様化が必要といえる。さらに大切な事は教化という実践の分野を基調とする事である。単なる文献的な理論構築だけでは成り立たない事をいかに学問的な体系の中に組み入れるかが重要である。そして、化学にとって必要な課題は、教化学の研究課題の情報化とその情報収集と分析である。冒頭述べた秋葉原事件が起きたときに、速やかに情報（事件に関する）ことだけではない、社会現象という広い意味）の収集とその分析を行い、教義の理論と、新しい分野の学問との関連をはかり、解決のための新しい仮説が立てられるまでの、まさにアルゴリズムの構築が早急の課題といえる。当研究所が宗門のナビゲーターと機能できるために、いまはその為の基礎固めが急務だと認識している次第である。